

# 琉球大学学術リポジトリ

## 教育方法観変革への模索 ―教職科目「教育方法」での試み―

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践研究指導センター 公開日: 2008-11-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤原, 幸男, Fujiwara, Yukio メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/8028">http://hdl.handle.net/20.500.12000/8028</a>

## 教育方法観変革への模索

### —教職科目「教育方法」での試み—

藤原 幸男\*

(1994年8月31日受理)

小・中・高校での授業体験から、授業とは、公定的知識を子どもに効率的に伝達し、子どもがそれを覚えてできるようになることだと、学生は思っている。この授業観ならびにそこで駆使される教育方法観をくずさなければ豊かな授業ならびに教育方法は形成されていかない。そこで、教職科目「教育方法」において、「教師の人間性と教育方法」という単元を組んで4回にわたって、講義・説明のほか、授業観ならびに教育方法観をくつがえすような論文を読み、ビデオを見せていった。そのなかでの学生の感想・レポートを中心に、学生の授業観ならびに教育方法観変革の様子について以下で報告する。

#### はじめに

ここ数年、教職科目「教育方法」（2単位、半年、94年度前期は受講学生93名）において、初っぱなに「教師の人間性と教育方法—教育方法の見方を問う—」という単元（4回分）を設定して、教育方法についての概念砕きを行い、そこから教育内容と教材をめぐる問題、授業指導をめぐる問題に入っている。

学生たちはすでに教育方法をめぐって一定のイメージをもっている。学生たちは、子どもとの触れ合いに教師のやりがいを感じているものの、子どもとの関係において、なめられてはならない、威厳をもつ必要があると捉えている。この威厳がいつのまにか権力にすりかわっていくのには、時間がかからない。また、教師と子どもとの関係を、教育する者と教育される者との一方的関係において捉えている。この一方的な関係がいつのまにか権力的関係に転化していく。授業についても、教えるべき公定的知識を効率的に教えるものが授業であり、その方法を学ぶのが「教育方法」の講義だと思っている。「教

師の人間性と教育方法」といういささか面はゆいテーマを最初にもってきたのは、教育方法についての学生の固定的イメージ=概念と切り結び、それを変える（崩す）ことなしには、子どもを育てる教育方法については論じられないと考えたからである。このような考えに立って、私は教育方法についての学生の既存概念に挑戦するような素材（文章・ビデオなど）を持ち込み、ゆさぶりをかけてきた。「教師の人間性と教育方法—教育方法の見方を問う—」という単元（4回分）は、1「教師の人間性と教育方法—生活綴方教師の子ども観と教育方法・技術—」、2「教師の人間性と授業実践—教師の成長と校内研修—」、3「林竹二の授業論と授業実践—ビデオ『林竹二・授業巡礼』を見る—」、4「林竹二の授業論と授業実践(2)—映画『授業・人間について』を見る—」という内容構成である。十分に成功したとはいいがたいが、本稿では、教職科目「教育方法」において試みてきた教育方法観変革への模索について、学生の感想・レポートを中心に報告し

\*琉球大学教育学部（教育学科）

たい。

## 1 教師の人間性と教育方法—生活綴方教師の子ども観と教育方法を中心に—

ここではまず、「若き教師たちへ」と題する遠藤豊吉の新聞論説を読んだ。この論説は、教師になるための条件として、子どもとの関わりにおいて底意地が悪くないこと、子どもの生命体への謙虚さと畏敬できる感性と知性をもっていること、の二点をあげている。そして、この二つの条件があればだれでも教師になれるし、この二つを完全に欠くものは教師として不適格だと言っている。安易に教職単位を取ろうとして受講した学生にとって、思ってもいない指摘だったと言えよう。

遠藤のあげた二つの条件を具体的事例で示すために、朝日新聞の「テーマ談話室・こども」に以前掲載された「受け持ったときから生意気だ」「好きだった先生だけに」を読み上げた。「受け持ったときから生意気だ」は、宿題の答え合わせのとき、宿題のページをまちがえてやってこれなかった友達にそっと見せてやった行為が見つかって教師の罵倒的発言を浴び、ショックをうけ、一生忘れられないという感想を書いたものである。「好きだった先生だけに」は、年賀状に「先生の授業が好きです」と書いたら「あなたの年賀状が一番うれしかった」と返事が返ってきて、いい先生だなと思っていたが、親と教師の二者面談のときに、「口数が少なくて何を考えているのかわからない」と言われ、それから自分に自信がなくなった。高校にはいって、担任の先生から「口数が少ないことは短所とは言えない。誠実できちんと考えるあかしでもあり、長所でもありうる。短所と決めつけることはないですよ。」と強い口調で言われて、救われるような思いだったという回想である。いずれも、感情的に何気なく発した教師の言葉が子どもに強い影響を与えた事例である。

このことを踏まえた上で、だが最初から遠藤のあげた二条件をもっているわけではなく、すぐれた教師も最初は人間的未熟さをもっていたが、それを克服しようと努力してきているのだ、

ということで、生活綴方教師の子ども観と教育方法・技術について論じた。とくに、たえず失敗し同僚教師（ときには自分よりも年の若い教師）に指摘されて、子どもの願い・要求が聴けるように自分を高める努力をしてきたことを、東井義雄『村を育てる学力』、戸田唯巳「脱がない帽子」の事例をもとに話した。このときすぐに感想を書かせれば良かったのだが、書かせることを忘れてしまった。しかし、このときの事例をもとにした講義は印象深く残ったようで、あとで提出していただいたレポートのなかにも何人かの学生は取り上げている。学生の感想をいくつか紹介しよう。

### 遠藤豊吉「若き教師たちへ」について

「教育評論家・遠藤豊吉さんの記事に、『優等生』—『よい先生』というコースを、つまずきを知らずに通ってきた教師は、自分の複製を子どもに求めがちになり、複製を拒む子どもへの洞察力を欠くことになる、とあった。私は、中学・高校時代を勉強で大きくつまずくことなく、現役で大学に入った。遠藤さんのいう、いわゆる、『優等性』であろう。そして、『先生』になろうとしている。私は、もう少しで、彼のいうような、典型的な教師になろうとしていた。去年、塾で英語を教えたとき、始めのうち、『なぜ何度も教えても、わからない子はわからないのだろう』『これくらいは、簡単なのに』などと思い込み、遠藤さんのいう、わからない子どもへの洞察力を欠くこととなっていた。ところが、同じ頃、私は、中学程度の英語ができて、大学でのフランス語（とても初歩的なものらしい）が全く理解できなかった。私が質問に答えられないでいると、フランス人の先生が、『奈々さんはいつも答えられませんか』『奈々さんに質問しても、答えられませんかよ』と言ったり、鼻をフンと鳴らしたりした。このとき、自分が塾の生徒とだぶり、彼らのわからないものがく気持を本当に理解することができた。そこで、生徒を責めるようなことをしなくなり、『どこでつまずくのか』『なぜつまずくのか』ということをまず考えて、教材研究するようになった。」

## テーマ談話室「こども」について

「最初の授業でもらったプリントの、テーマ談話室『子ども』に書かれていた体験談はとても衝撃的でした。こんな横暴な教師がいるのか、またなぜこのような人が教師になれるのかと考えさせられました。教師は果して教え導く絶対的存在なのか、そして子どもはその下で従う服従者なのかという疑問がわきおこりました。子どもの気持ちを考えない行動・言動はその子どもに一生消えない傷を負わせてしまう危険があることを教師は自覚するべきだと思います。／また、この体験談に対する反響の中の『教育の真の意味を知らない人間が教師になる可能性は大いにある』という言葉はとても印象的で真の教育とは何かを考えさせられました。教師は免許さえあればなれる、というのは完全に間違っています。私は、前に授業でやった『子どものつぶやきが聞こえる』教師こそが、本当に教師になれる資格をもっていると思います。」

## 戸田唯巳「脱がない帽子」について

「戸田唯巳氏の『脱がない帽子』で、戸田氏は始め、帽子を脱がない子のことが見えていず、ただただ注意するだけだったが、ある日を境にこの子が見えはじめ、遠足の日にドロのついた帽子をかぶっている子を見て帽子を洗わせたくて自分から川の水に頭をつけたことは、子どもが見えた結果の実践ではないだろうか。もし、そのとき、ドロのついた帽子をかぶった子の嫌な気持ちをわかったとしても、この子だけを呼び出して帽子を洗わせていたら、逆にこの子を傷つける結果に終わっていたのかもしれない。さらに、戸田氏はこのときの帽子を脱がない子のことが見えたことを、良かったと安心してその場を終わることなく、この子が帽子を忘れても平気になるまでは、やらなくてはならないことがあると語っている。彼は常に子どもを見ようと努力している。／子どもを見ることができると、言い換えれば、子どもの立場に立てるということである。」

## 2 教師の人間性と授業実践—教師の成長と校内研修—

人間性ということばを使うことにはやや面はゆい気持ちもあるが、ここで子ども観・人間観・教育観を含めて、対人接触において現れるその人のものの見方・考え方・感じ方を指すことにする。このような人間性は、その人の建前思想とは別に、日常的談話における表情や態度のなかにそれとなく現れ、うかがうことができるものである。こうした人間性は授業のなかにも現れる。また、教育目的を実現するために授業において駆使される教育方法のなかにも現れる。そこで、前回の講義を発展させるために、「教師の人間性と授業実践」について扱った。

ここでは、伊藤功一校長を中心とした青森県・三本木小学校での試みを取り上げ、それを収録したビデオ「若き教師たちへ」(91. 4. 29)を見ることにした。伊藤校長は、哲学者で全国に授業行脚をして歩いた林竹二に学んで、授業を根本的に捉えなおすために三本木小学校を臨床教育の実践の場としてとらえ、だれのものでもない自分の授業を創造する、という仕事に取り組んだのであった。

伊藤功一は、同じ時期に『世界』1991年5月号に掲載された論文「若い教師たちへの提案—グラフィア『教師誕生』によせて—」において、次のように述べている。

伊藤は「安易に日常の授業を累ねていけば必然的に力量が備わるのだと誤解しないこと」が大切であると述べる。あるパターン=形式にのって授業をやれば授業らしきものができ、安心する。特定パターンを身につけ、しだいにそのパターンから脱却することを心がけることがよいとされている。しかし伊藤によれば、「実際には、一度身につけた指導のパターンから、自らの授業へと脱皮するのは難しい」のであり、「年を累ねる程思考に柔軟性を失い、他の考えを受け入れようとしなくなる。そして、自分が若い日に身につけた授業のパターンが、他の考えよりもすぐれていると過信する」。そこで伊藤は、若い教師たちに次のことを提案する。

一つには、若い教師時代に、授業における修羅場を可能な限り多く経験することである。立ち往生の経験、しどろもどろになる経験のなか

で、自分の指導のあり方が少しずつできていくのであり、「困難を忌避せずに、自分の意志で授業における修羅場に身を投ずる気概を持ってほしい」とする。

二つには、授業にあたって、教師自らの教材解釈を徹底することである。「どんな教材でも、教師自らの眼で読み確かめ、自分の解釈を持つことが『よい授業』の基礎なのだ」、というのである。

三つには、教師自身が学ぶということである。「教師という専門職にはあるけれども、その力量に於いて非力なのだという自覚をもつこと、そして、それだからこそ、謙虚に学ぶという姿勢を持続させる努力を怠ってはならない」とし、「自分の非力な授業が、子どもたちに与える影響の深さを思うとき、授業とは、ただ難しいだけではなく、おそろしいものでさえあるという実感を抱くことができたなら、その時にこそ、はじめて『教師誕生』と言ってもよいのかも知れない」と述べている。

こうした授業観をもとにして、三本木小学校の授業実践は学校での校内研修を軸に行われていく。初任者教師に対して「土台も自分でつくるのだ」といったり、「海雀」（詩）の授業で立ち往生し途中で切り上げてしまった実践を収録し、「それでもいいんだ」とする伊藤の見解を載せている。あるいは、「田中正造」の授業を別の教師がひきついでその教師なりの構想で新たに授業をしてみる、といったバトンタッチ授業も行い、そのなかで「教師が学ぶ」ということや「子どもに誠実に向き合う」ことの大切さを教師自身が認識していくのである。この過程を一年間にわたる校内研修をとおして理解してもらい、という組み立てになっている。（ビデオは75分で、長い。そのために解説せずに直接見てもらい、感想を書いてもらった）。

授業を見たあとの学生の感想を見てみよう。

「教えることは、学ぶこと」「学ぶとは、変わること」

「教師をめざしている自分にとって、非常に考えさせられるビデオだった。林竹二氏の言った『教師の仕事とは、教えることではなく、学

ぶことだ』『学ぶということは、自分が変わることだ』という二つの言葉は、これから教師を目指す者にとって、とても大きな意味をもっている。この言葉の意味を、もっと深く考えて自分に役立てていきたい。」

#### 土台も自分でつくる

「今まで、教師は一人前であり、もうすでにいろいろな知識を十分に備えており、それを生徒に教えていくのだという考えが頭の隅にどうしてもあり、そうでなければ教師にはなれないという気がしていたが、このビデオを見終わったあと、教師も始めは半人前で、その後の経験を通して生徒から、また教師から学び、吸収して一人前になるんだという当たり前のことにやっと気づいたような気がする。」

#### まず、自分をさらけ出すことから始める

「このビデオで『まず自分をさらけ出すことからはじまる』というのを聞いて、考えが改まる気がしました。」

「全編をとおしてみても、教師たちが自らの欠点をさらけだし、そうすることで己が抱える教師としての問題をみつけ自分だけでなく仲間の教師と考えていくやり方をみていくと、遅々としながらも教師として進歩していく様子がよくわかった。」

#### 子どもに対して誠実であること、子どもを見くびらないこと

「子どもたちと真正面から向き合う姿勢が、とても誠実的で、印象深い。苦しみながらも、教材研究が楽しくなってきたという先生の発言はたのもしい。」

「子どもだからといって、見くびっているところが全然感じられなかった。」

#### 授業を共同で検討すること

「この番組をみて、まず思ったことは、一人の先生だけの力では完璧には数えることはできないということです。他の先生たちも一緒に授業を見ることでその先生（授業）に対して討論ができ、次の授業にはさらによく進めることができるようになって、先生も生徒もともに学習していかなければいけないんだ、ということがよくわかった。」

「学校は学ぶところである。それは児童・生徒が学ぶところであり、教師自身が学ぶところなのです。研究授業はそれをうまく描いていると思います。教師が考えていた指導案どおりにはいかない。それほど子どもたちは教師たちが考えているよりも、未知なる可能性や考えをもっているのです。教師は研究授業がおこなわれているからこそ、そのことをより率直に知り自分のとまどうところを教師どうして相互に教え学び合えるのです。それを知る場が何回となくおこなわれているのですから、三本木小学校は学舎なのです。土台を自分自身でつくり教えていく、その土台を作る力となるのが研究授業だと思います。」

### 3 林竹二の授業論と授業実践—ビデオ

#### 「林竹二・授業巡礼」を見る—

伊藤功一の支えになったのが、林竹二の授業論と授業実践であった。そこで、次の時間は、林竹二の軌跡をたどった「林竹二・授業巡礼」(88. 2. 15放映)を見せた。このビデオは、林竹二の授業風景を紹介しながら、授業を受けた学生の回想を中心としてつくられている。沖縄での授業を映画化した「授業・人間について」で、授業における子どもの表情を映しながら、沖縄の子どもの感性のすぐれていることを、「授業のなかの久茂地の子供たちの反応には、その質の高さとつよさと厚みにおいて、本土の子供と格段の違いがある」(『林竹二・授業の中の子どもたち』日本放送出版協会)という表現で指摘している。その背景を林は沖縄の歴史と文化に見、そこに生きる人々の誠実さに見たのであった。その後林は、さまざまな差別を受けてきた子どもたちが学んでいる尼崎工業高校に実践の舞台を移し、晩年には、東京の南葛飾高校定時制(南葛)で実践してきた。一度だけだが、南葛で林竹二の授業に出会って自分の生き方を変えた藤倉義幸君の一人語り(20分程度)を聞き、林の実践の意味を問い直す、という展開になっている。

林は、教育にあって、子どもという生命への畏敬の念が何よりも重要であることを説き、授

業とは子どもの中に事件をおこすことなのだ、学ぶとは変わることなのだ」と指摘している。そして、自分の授業は大学教授の講義・講演であって授業ではないといわれてきたけれども、外見しか見ないのは残念だ、教育にあっては、外見ではなく、内面的な活発さこそが重要であるということも指摘している。

ビデオを見た学生たちの感想を見てみよう。

#### 沖縄・久茂地小学校での授業風景から

「心に焼きつくほど印象に残っていたのは、先生が子どもたちに対してたえず笑いかけていたことである。」

「子どもたちが真剣に、かつその授業に吸い込まれていく何かがあるように思われた。」

「林先生の授業を受けた久茂地小学校の子どもの(回想の)中で、『先生の質問に対して答えを出すために自分の頭で必死に考えた』というコメントが印象的でした。」

「子どもは発言しなくても、実は心のなかでいろいろなことを考えていることは、私も経験があるのでわかります。生徒全員が集中して耳を傾けるような授業こそが、本当の授業であり、一つの授業で一生徒の生き方や考え方を変えたほどの林竹二先生の授業は、良い授業だったのだと思います。」

「林先生の沖縄・久茂地小学校についての一文に感動しました。テストでは計れない良さがあることが沖縄に残されているということを知ったし、これからは、そういったものを生かせる教育を考えていかなければならないのではないのでしょうか。」

**授業とは、子どもの心のなかに事件を起こすこと**

「授業とは、子どものところの中に事件を起こし、それを自ら解決させ、学ぶ喜びを生むものなのだという言葉に最も感銘を受けた。……本来、教育とは何であるかを考えさせられた。」

#### 生き方を変えるということ

「林先生は藤倉君に『人間としてまっとうに生きる意志を忘れずに(生きてください)』ということを教えた。これが人間として生きていく上で一番大切なのではないでしょうか。人間

だけが自分の意志で生き方を変えることができるという言葉は、私の胸のなかに大きく残っています。」

「学校の授業が本当に人の人生を変えてしまうことがあることを知って、感動するとともに、教師の責任の重さと可能性について考えさせられた。彼が学校の重大さを理解したことは、林先生の授業のおかげだと思った。授業を真剣に考えている彼に頭が下がる思いになり、また、そう思わせる授業をおこなった林先生ほか、南葛高校定時制の先生方に、本当の教育のあり方、授業のあり方を教えられた気がした。」

「先生が何気なくやった授業が、自分の生徒の一生を変えていくきっかけになるかもしれないと思うと、授業というものに対して、とてつもなく大きな恐怖と背負えないほどの責任感を感じた。」

#### 私も林先生の授業を受けてみたかった

「林竹二先生の、生徒の内に秘めているものを引き出してくれるという授業を自分も一度受けてみたい気持ちになった。」

#### 4 林竹二の授業論と授業実践(2)―映画

##### 「授業・人間について」を見る―

林先生の授業を一度受けてみたかったという学生の要望に応じて、沖縄の久茂地小学校で行われた一時間(45分)の授業(「人間について―アマラとカマラー―」、1977年2月9日実施)をそのまま映画にしたものを見せることにした。学生に見せたのは、映画のビデオ版で、1992年6月に筑摩書房が販売したものを使った。

この映画は、問答しながら子どもを追い詰め、子どもが応えられなくなると林が説明していく、という形で進行し、外見上は講義・説明的授業で、学生たちが見慣れている授業に近い。にもかかわらず子どもたちは林の授業に引きつけられ、夢中になっている。授業の外見と内面の違いに気づかせるために、「映画の最後で、子どもたちは解放された表情をしているが、この表情は授業が終わってほっとした様子を現しているのか、それとも満ち足りて充実したことを現しているのか」と問いかけた。また、ビデオを見て

いる途中で眠くなり臥せている学生も何人かいた。その学生に対しては、なぜ眠くなったのかも考えてほしい、と述べ、このことを含めて感想を書いてもらった。以下で、学生の書いた感想を紹介したい。

##### 子どもの表情に注目した

「先生の授業が終わったときの生徒の顔は“あー、やっと授業が終わった”というより、一時間ずっと緊張していて、その満足感の現れだったように思った」

「授業を聞く子どもたちの表情が林先生の言葉に微妙に反応して変わっていた。発言したことを否定された子も、まちがったことを言ったときのとまどい・恥ずかしい表現はみせてなく、どうしてだろうと疑問について考える表情を見せていたような気がする。授業としては、情報を伝えて、それについて考える時間をもたせる間のある授業だという感じがした。生徒の発言一つ一つを大切に、それについてみんなで考える機会を与え、授業に対する一体感が生まれていたようだ。終わったあとの一瞬考える表情と、ほっとした顔は自分の中に生まれた考えについて感じているようだった。」

「子どもたちの表情から、先生の一言一言を自分の頭で精一杯考えているのがわかった。発言をしない子ども、表情でどれだけ授業に集中し考えているかが伝わってきた。」

##### 普通の授業だけど、引き込まれた

「私は、授業にのめり込まないように第三者の立場で見ようと思っていたが、結局は授業を受けている子どもたちと一緒にになってビデオを見ていた。」

「林先生の授業は特別な授業でもなく、テクニクがあるように思えず、ごく普通という印象でした。この授業を見て、子どもを引きつける授業について考えさせられました。」

「林先生の授業は、普通にみると、そんなに良い授業とは思えなかったが、子どもたちがすごく影響を受けているのを見て、やはりすばらしい授業だったんだなあ、と思った。」

つい眠ってしまった。その理由を考えてみると……

「後半、少しうとうととして、別の意味で我に返ったのだが、その理由をよく考えてみると、ある程度知識を得て、人格形成が比較的できつつある私たちは、あとは先取りして結論・感想を出してしまうからだと感じた。」

「ぼくは、ビデオを見ながら、『絶対に発表させられることはない』という安心感の中で眠ってしまったのだと思います。」

「今回、私は始めてビデオを最初から最後まで集中して見るできませんでした。今日は、眠っているうちの何人かの一人となってしまいました。前半はすごく集中して見ていたせいか、後半には睡魔にあっけなく負けてしまいそうになりました。でも眠くなる授業がたいくつなものだとは限らないと思います。私は眠いながらも、林先生の話す言葉一つ一つを洩らさず聞きたいと考えていました。」

「自分はビデオを見ながら眠くなった方である。普通の授業とは異なり、生徒が発言することもなく、板書を写すこともなく、ひたすら先生の話の聞いているというのは、見方によっては単調である。しかしつまらない話の場合だと、イライラして、眠くなることはない。眠くなるというのは、必ずしも授業に対して否定的なのではなく、むしろ話のなかに引き込まれて気持ち良くなっている状態ではないのか。その話に集中し、眠ってしまうか、またはいっそう頭や心を忙しく働かせるかは、生徒の体調や性質、その他の要因によって左右されるのではないだろうか。授業の外見的な形式にとらわれるのではなく、内面の変化に深い視線を送る必要を感じた。」

## 5 レポート「教師の人間性と教育方法の関係」について

「教師の人間性と教育方法」単元を終えて、整理の意味をこめて、「教師の人間性と教育方法について」というテーマでレポート（400字詰原稿用紙5枚）を提出させた。具体的事例を離れて教師の人間性と教育方法について論理的に考えることは、むずかしいようであった。レポートの記述内容を分類してみると、①他の本

をもとにしてまとめたもの、②講義で紹介した事例への感想にとどまっているもの、③講義で紹介した事例にコメントをしながら最後にまとめて教師の人間性と教育方法について述べているもの、④教師の人間性と教育方法の関係について論理的に述べているもの、の5つに分類できる。②と③のタイプが比較的多く、①と④は少なかった。これは、課題の性格上仕方ないことであった。しかし、全体としてみれば、学生たちは真剣に取り組んでいることがうかがわれ、課題提出者としてうれしく思った。

このレポートのなかに、これまで抱いていた教育方法観に触れ、教育方法観が変わってきた、と率直に述べているものがいくつかあった。例えば、次のようなレポートである。

「僕は今まで、教育とは、教師が教え、生徒がそれを覚えるものだと思っていました。しかし、三本木小学校はちがっていました。」

「私は、大学の2年まで教育学部にながら、教師というのはただ教科書を教えればよいのだと思っていました。しかし、3年に進級し、教育実習とも重なり、教師の何たるかを自分なりではあるが、解釈できました。」

「授業とは、大学に合格するために、必要な知識をうまく覚えるテクニックばかりを教えるものだと思い込んでいました。また私自身もそういう先生がすばらしい先生だと思っていました。今、考えてみると、本当に楽しい授業、おもしろい授業、感動する授業を受けたことがなかったと思います。今まで、私たちが受けてきた授業は知識の詰め込み授業であって、心の教育はなされていなかったのです。」

「授業とは、一般的には、対象とする子どもに、知識・技能を教えるために、教材教具を用いて、教師が教える行為である。実際私もそういうことだと思ってきた。というよりも、自然とそう思うようになったというほうがいい。なぜなら、私が今までに出会った教師がそのような印象だったからである。しかし、この講義を受けるうちにちがうように思えてきた。私は、教師が教材を使って子どもに指導するという図式でしかとらえていなかったように思う。伊藤



功一氏の実践を見て、教師の役目は、いかにしてそれぞれの生徒に好きなものと出会うチャンスを与えるかということであり、そこへ導き、後押しすることであることに気づいた。」

「現在の授業の方法は、教師が生徒の上に立って生徒たちを見下ろすといったような形ものが非常に多い。教師の役割は、知識をただ単に与えるだけでなく、生徒自身がそれを導き出せるよう援助していくことである。そのためには、教師は学ぶ子どもと同じ地平に立ち、心の奥底に知的感嘆を与える授業を創造していかなければならない。」

いくにんかの学生はこのような感想を書いている。今までの授業は教師が知識を伝達し子どもがそれを覚えるといった形だったことに改めて気づき、そうした授業がかえって良い授業だと思い込んでいたことを反省し、それとちがった、教師が刺激し、思考を促し、子どもが自分の世界を膨らませていくことを援助するのが授業であり、「心の教育」を含みこんだ授業が良い授業なのだ、と気づいていったのである。このことからすると、教育方法観を変えようという当初のねらいはある程度達成されたように思える。

問題は、それを感性レベルにとどめるのではなく、具体的事例をふまえてことばで記述することである。その点では、不充分だったように思われる。講義では、「教師の人間性と教育方法」について扱ったのだが、教師の人間性と教育方法の関係を自分なりにとらえて文章化することは、苦しいけれども必要なことである。数は少ないけれども、何人かの学生はそのことに取り組んでいる。

「子どもを操作し、管理するために教育方法を用いるか、それとも子どもを育てるために教育方法を用いるかということ、教師の子ども観が反映される。たとえば、人権尊重の感覚を子どもにつけようとすると、教師の振る舞いや行動の中から感じられなければ、実際にそれは子どもたちの中に残らないだろう。」

「教育方法とは、いわば教師の人間性を鏡として伝わるものである。教師の人間性がゆがん

でしまったら教育方法は形を変え、本来の目標をなくしてしまう。教師の人間性と教育方法とは、こうした関係を持っているのではないだろうか。」

このことに係わって、林竹二の実践において林が問いかけしたあとに笑顔を見せながら子どもの反応を待っていることについて、何人かの学生は論及している。

「林先生はわざとそのような笑顔をつくっていたのか。いや、あの笑顔こそ林先生の人間性ではないのか。もし、つくった笑顔や表情では、生徒には何も伝わらないのではないか、そんな気がするのです。生徒の気持ちを本当に良く理解し、生徒の言おうとしているのをじっくり待つというやさしさの表に出た笑顔だと思うのです。」

なかには、林の著述のなかから、授業での林の対応とそこでの対応観をさぐりあて、そこから学ぼうとしている学生もいる。その学生は次のように書いている。

「『私の出会った子どもたち』という本に、次のような林先生の言葉がのっていた。『私の授業の展開は、あなたまかせで、ほとんど子どもがひっぱっていくわけです。自分の思い通りに進んだ授業はつまらない、子どもから思いがけないものが出てきて、こっちが面食らって何とか筋道を探り当てて展開していくような授業がほんとは良い授業なのです。そういうときに、まごまごする能力が教師には必要なのです。』

私は正直言って驚いた。林先生は、プラン通りに進めているからこそ、あんなにスムーズにわかりやすい授業であるのだと思っていたからだ。実際は逆だった。一つの教材を、子どもと一緒に考えて、つなひきではなく、玉入れのように協力して一つの結論へと導いていたのであった。教師も一人の人間である。完璧であるはずはない。子どもたちに格好よくみせるのではなく、格好悪くても、子どもと同じ視点に立って一緒に考えることのできるような、いわば『格好悪い』先生であるべきなのだ。」

マニュアル化された教育方法と教師の人間性

の関係について、何人かは触れていた。いくつか紹介しよう。

「授業は教師の顔であるといってもよいだろう。そんな大切な授業を、用意された教材を脱線することなく、ただ、一直線に走るだけでは、生徒が置いてきばりにされるだけである。心に何の響きも感じない授業は、生徒にやる気を起こさせることはできないし、今後その授業の中の教師も、生徒の心の中から消えていくだろう。そんなことはあまりにも悲しい、教師として恥ずかしいことである。」

「現実には、40人以上の子どもを教室のなかで、文部省の決めたカリキュラムに従って教科を教えなくてはいけない教師は、時間と戦いながらノルマ消化に焦ってしまい、ときとして『マニュアルがあったほうがいい』と思うかもしれない。先輩や同僚教師のアドバイスや自分の過去の経験といったものが、不文律のマニュアルになっているかもしれないし、多少のマニュアル化は必要かもしれない。もし効果的かつ効率的な教育的アプローチが見いだされたならば、それを一般化して広めることも大切かもしれない。

問題は、どこからどこまでマニュアル化されれば、方法論のみに教師が傾倒することなしに、『子ども本位の』あるいは『子どものための』教育が実際になされるかということではないだろうか。子ども不在のマニュアル、言葉を変えれば、教師あるいは大人本位のマニュアルであれば、それは確かに教師側の実務的スピードアップを可能にするかもしれないが、子どもの実態を見えなくさせてしまう危険性をつねにはらんでいると言えるであろう。この取捨選択や判断の過程で、私は教師の人間として他の人間に関わる姿勢、あるいは生き方や人間性といったものが大きく関わってくると思う。」

後者のマニュアル論はよく考えられている。このレベルまでつめて考えないと、教師の人間

性と教育方法の関係は上滑りになる危険性もあることを、授業担当者としていましめる必要を感じている。

#### 単元「教師の人間性と教育方法」の参考文献

- ① 遠藤豊吉「若き教師たちへ」『琉球新報』1983年4月6日付。
- ② 朝日新聞テーマ談話室編『こども』朝日新聞社、1990年。
- ③ 東井義雄『村を育てる学力』明治図書、1957年。
- ④ 戸田唯巳『子どもの目は澄んでいる』明治図書、1985年。
- ⑤ 林竹二・伊藤功一『授業を追求するということ』国土社、1982年。
- ⑥ 伊藤功一『教師が変わる・授業が変わる校内研修』国土社、1990年。
- ⑦ 伊藤功一『魂にうったえる授業』日本放送出版協会、1992年。
- ⑧ 武田忠・伊藤功一編『教師が変わるとき・授業が変わるとき』評論社、1994年。
- ⑨ 小野成視『ひかりは たもち 授業を創る—三本木小学校でおこったこと』評論社、1994年。
- ⑩ 林竹二『授業・人間について』国土社、1973年。
- ⑪ 林竹二・松本陽一・小野成視『林竹二・授業の中の子どもたち』日本放送出版協会、1977年。
- ⑫ 林竹二編『授業による救い』径書房、1993年。
- ⑬ 林竹二編『続・授業による救い』径書房、1994年。
- ⑭ 日向康『林竹二・天の仕事』現代教養文庫、社会思想社、1992年。
- ⑮ 安里盛市『林竹二・斎藤喜博に学んで』一荃書房、1992年。